

涅槃經梵行品に見られる一連の仏伝について

加 治 洋 一

梵行品八の二に、仏陀が慈心より神通を示した例として、仏伝中から幾つかの事例が一纏りにして挙げられている箇所がある。即ち、(1)提婆達多に教唆された阿闍世王が仏陀に害心を抱き放った狂象を、指端に五師子を化作し調伏したこと。(2)力士五百人に神通を現して、高慢の心を除き法を説いたこと。(3)尼犍子の教えを奉じる首波羅の人民に様々な神変を化作して布教したこと。(4)子を喪い狂乱するバラモンの妻婆私吒のために子を化作し、狂乱から醒めさせて法を説いたこと。(5)重病の比丘に自らの髀肉を割き与えて癒治させるが却ってその瘡の苦痛に迫られて呻吟する優婆夷摩訶斯那達多に良薬を化作し、平癒せしめ法を説いたこと。(6)蘇を食べ過ぎて頭痛腹痛を病む調達頭腹を手ずから摩し平復させたこと。(7)波斯匿王に捕えられ目を刳られた五百人の群賊に香薬を化作して本復させ、彼等の為に法を説いたこと。(8)琉璃太子に捕えられて、耳鼻を刳られ手足を截られた釈迦族の女性一万二千人の為に、傷を水で洗い苦痛を除き法を説いたこと。

右の八つの物語は、四無量心について様々に議論が重ねられ、慈悲を修した菩薩は極愛一子地に住すると押えて行くその節目として説かれている。即ち、特に慈心に関して考察が進められ、菩薩が慈心中に立てる願が教示された後、遂に「一切声聞縁覺菩薩諸仏如来所有善根慈為根本」「慈者即是諸仏世尊無量境界、無量境界即是慈也。当知是慈即是如来」と説かれる。そこで迦葉菩薩が「一切衆生何故不以菩薩威力等受快樂」つまり菩薩の慈が無量

あであり実思惟なのであれば、総ゆる衆生が等しく利益される筈ではないか、と問題を提起する。これに対して「菩薩之慈非不利益」と答え、右の物語が例証として挙げられてくるのである。象や盜賊や果てはデーヴァダッタにまで仏の慈は及ぶ。それも法を説き菩提心を発させる契機として神通が示されるのである。

さて右の一組にして掲げられる仏伝中の素材と殆ど共通する事例が婆沙論八十三に見られる。それも涅槃經と同じ文脈で説かれてくるのである。即ち四無量心に関する一連の議論の中、菩提について論が進められた後に「諸有情類由仏普慈慈陰之時為得樂不若得樂者、何故地獄傍生鬼界及余苦厄諸有情類由仏慈陰而不離苦」と先の涅槃經に於ける迦葉菩薩の質問と全同の問題提起がなされ、それに答える例証として挙げられるのである。手短かに検討を加えてみよう。

(1) 阿闍世王の放った狂象を調伏したこと。

これは涅槃經の(1)と大筋は一致する。ただし状況の説明や頭わした神通の内容が婆沙論の方が豊かであり、しかも象の為に象の言葉で法を説く等の記述がある。この物語はまた根本有部昆奈耶破僧事十九にも現われ、婆沙論と殆ど同じ形である。

(2) 力士盧遮に神通を現して三宝に帰依させたこと。

涅槃經の(2)と同様、仏陀最後の旅の途次に時所を定め、登場人物も同じ力士であるが、状況設定や神通の内容は異なる。この素材は四分律四十二、五分律二十二にも現われ、婆沙論と大略に於て一致する。

(3) 子を喪ったバラモンの妻婆私吒に子を化作して憂悩を除き法を説いたこと。

これは小異はあるが涅槃經の(4)とよく一致する。この素材はま

た長老尼偈一三三〜三八にも見られる。婆沙論が婆斯瓊に六子があつたとするのに対し、涅槃經が「唯有一子愛之甚重」と述べるのは極愛一子地を想起させて興味深い。

(4) 田と子を一時に失ない発狂したバラモンに田と子を化作して憂悩を消除し、法を説いたこと。

この話は直前の(3)と全く同質である。涅槃經には登場しない。病の比丘に自らの髀肉を割き与えて平癒させた大軍居士(Mahsena)の妻がその刀瘡の苦痛に呻吟するのを神力によって治癒させ、彼等の為に法を説いたこと。

(5) 小異はあるが涅槃經の(5)と大筋は同じである。ただ婆沙論でこの妻の行ないを菩薩行と看做していることは銘記される必要がある。根本有部毘奈耶藥事一にほぼ同一の物語として説かれているが、そこでは人肉を食べれば壑吐羅底(Tullacaya)であると制裁する因縁譚として説かれている。

(6) 勝軍王(Pasenadi)に捕えられて手足を断たれた悪賊に療薬を化作して苦痛を医し、為に法を説いたこと。

(7) この物語は涅槃經の(7)と類同である。
天授(Devadatta)の頭痛を、鷲峰山を穿って手を伸べて、頭頂を摩して除いたこと。

これは涅槃經の(6)に対応する。婆沙論のこの一段に「我於天授慈心憐愍与羅怛羅等無異者」の一句が存在することは、涅槃經に繰返し説かれる「於諸衆生起大慈悲生於子想如羅臘羅」の類の句、或は極愛一子地との関連で見落せない。ただし涅槃經の(6)に直接その類の句がある訳ではない。また筋立自体は、根本有部毘奈耶破僧事十四にみられる腹痛を癒す物語の方が涅槃經に直接結がるものである。ここにも「我於提婆達多及羅怛羅心生平等更無有異」

の一句が存在する。

(8) 病んで動くことも儘ならず、糞中に臥す比丘を論して病苦を癒し法を説いたこと。

(9) 鷹に逐われた小鳥に樂影を現じて怖畏を除いたこと。
この(8)(9)に対応するものは涅槃經にはない。

(10) 毘盧宅迦王(Vidudabha)に拉致され手足を截られた五百人の釈迦族の婦女に衣を着せ苦痛を銷除して法を説いたこと。

これは涅槃經の(8)に相当する。この釈迦族の女性の斬殺については様々に伝承されており、同じ婆沙論の百五、根本有部毘奈耶雜事八、また増一34-2、Dhp. A. P. 56等に見られる。物語の説かれる文脈は区々であるが、物語自体の大筋は孰れもよく一致する。

以上雑々と概観してきたが、涅槃經が八話総てを「皆是慈善根力令……見如是事」とするのに対し、婆沙論は(1)(2)を「此中慈纏謂現神通」とし、(3)〜(6)を同じく妙藥、(7)(8)を妙觸、(9)(10)を樂影を現するものと分類している。涅槃經の方が概して表現が誇大であり、婆沙論の方が状況説明に詳しいことはさて置いても、物語自体に関して両者はその伝承の系譜を異にしていると思われる。しかし一方でこれだけ共通する素材を同じ文脈で、しかもほぼ同一の順序で用いておりそこに何等かの共通する思想土壤、或は両者の交渉ということを想定せざるを得ないのである。

また婆沙論に存在せず、涅槃經にだけ見られる(3)の首波羅(Syhapaka)への布教の物語は涅槃經の創出者乃至その伝承集団を考える上で見落すことのできないものである。今は憶測を逞しゅうすることは控えねばならないが、この地が阿舍その他で富樓那と因縁の深い土地であること等々留意しておく必要がある。